

周期的恐慌の物質的基礎と回転循環

沢田 幸治

—

第二次世界大戦後における恐慌のいわゆる形態変化をどのように理解すべきかという問題、それは今日においてもなお、恐慌研究の中心課題であらう⁽¹⁾。

右の点との関係で戦後今日に至るまでその研究が続けられている問題の一つに産業循環過程の分析——産業循環論の構築とということがあげられる。戦後における恐慌の形態変化を理解する理論的基準として、資本主義（自由競争モデル）一般における恐慌の（可能性および）必然性の解明とならんで恐慌を一局面とする循環論の構築が必要と認識されたためであらう。そうした研究の成果として多くのすぐれた労作が存すること、周知のとおりであるが、今、これら多くの労作に研究に共通する一つの点をあげれば、それらが、いずれも、固定資本の独特

な回転の仕方を理論構成のポイントにしているということである⁽²⁾。いうまでもなく、マルクス自身が固定資本ないしは機械の更新期間と恐慌の周期性との間に密接な関係の存することを指摘しているからである。われわれの小稿における課題もこの点に関連する。すなわち、右に記したように、マルクスは固定資本の更新期間ないしはその回転の仕方と恐慌の周期性との間に密接な関係のあることを確かにのべているのではあるが、どのような理由で前者が後者を規定しているのかという点についてはほとんど説明していない。そのため、この点に関しての理解は論者により異なっており、それが産業循環の説明——理論構成における差異をもたらす一大原因になっている。とすれば、まず必要なことは、マルクスがどのような理由で固定資本の更新期間が恐慌の周期性を規定する一契機であるとのべているのかを、マルクス自身の記述について——即して——明らかにする

ことであろう。産業循環の過程の解明を試みる場合、誰でもこの点の検討を行なわざるをえないわけであるが（それゆえ当然行なっているわけであるが）、理論構成を企るに急なためか、これまでに多くの論者はこの点について十分納得する前に、自分なりの「解釈」を行なうて——その上に立って理論を展開して——きたといわなければならないのではなからうか。もし、そのようにいえるとするれば、構築されてきた理論は強固な基礎をもたない砂上の楼閣であるということになる。むろん、われわれは、これまでの研究がすべて砂上の楼閣であるなどと考えているわけでは毛頭ない。だが、固定資本の更新期間と恐慌の周期性の關係についてのマルクスの記述について——そのものの解釈としては——十分納得できるものを未だ見出していないのも正直なところ事実である。小稿の課題として周期的恐慌の物質的基礎と回転循環（固定資本の存在に条件づけられた循環）の解明を設定した所似である。

右にのべたように、ここでのわれわれの課題はマルクスの固定資本と恐慌の周期性に關してのべた文章の解釈——それもごく二・三の——というはなはだ創造性を欠いた作業に限定されている。

二

いずれも周知のものではあるが、問題の所在を知るため、機械の更新期間についてマルクスがエンゲルスへ問いあわせた手紙とそれへのエンゲルスの返事、および、その返事に対するマ

ルクスの礼状、これらを見ることから始めよう。⁽³⁾

〈マルクスからエンゲルスへ 一八五八年二月二日〉

「ついでだが、たとえば君たちの工場では、どのくらいの期間で機械設備を更新するか、教えてもらえないだろうか？ パベジの言うところでは、平均してマンチェスターでは機械設備の本体は五年ごとに更新されることだ。これは僕にはやや意外で、十分には信用できないように思われる。機械設備が更新される平均期間は、大工業が確立されて以来産業の運動がおる多年にわたる循環を説明するうえでの一つの重要な契機なのだ。」
 〈エンゲルスからマルクスへ 一八五八年三月四日〉

「機械の問題については、確実なことを言うのは困難だが、とにかくパベジは非常にまちがっている。最も確実な標識は、各工場主が年々自分の機械について磨損分や修理費を償却するパーセンテージ、つまりある一定期間内に彼の機械を完全に償却しきるための年々のパーセンテージだ。このパーセンテージは通例 7.5% だが、このパーセントで行けば、機械は 13 年で、使用による年々の償却分によって埋め合わされ、つまり損失なしに完全に更新されるわけだ。……ところで、1858 年はもちろん長い期間で、そのあいだには倒産もたくさん起こればいろいろな変化も現われる。他の部面に転じて古い機械を売却したり、新しい改良を採用したりもする。だが仮りにこの計算がだいたいいかに正しいものでなかったら、慣習はとくにこの計算方法を変えたはずだ。……」

機械の本体に別の性質を与える、つまり多少ともそれを更新するには、十年から十二年で十分だ。135年という期間は、もちろん、倒産とか、修理が高価につきすぎるような主要部分の破損とか、その他類似の偶発事に影響されるので、この年数はもう少し短く考えてもよい。だが、十年を下ることはおそらくあるまい。」

（マルクスからエンゲルスへ 一八五八年三月五日）

「機械についての説明どうもありがとう。十三年という年数は、それが必要なかぎりでは、理論に一致している。というのは、この年数は、工業再生産の一期間の一単位を示しており、この単位期間は、大きな恐慌が繰り返される周期と多かれ少なかれ一致しているからだ。もちろん、恐慌の経過は、その再生産期間から見ても、なおまったく別な諸契機によって規定されるのだが。僕にとって重要なのは、大工業の直接的物質的前提のなかに循環を規定する一つの契機を見いだす、ということだ。」

みられるように、マルクスは、「機械設備が更新される平均期間」が「産業の運動がとおる多年にわたる循環を説明するうえでの一つの重要な契機」であること、あるいは、その更新期間たる十三年という年数が「工業再生産の一期間の一単位を示しており」かつ、「大きな恐慌が繰り返される周期と多かれ少なかれ一致している」ことをのべている。そして、重要なことは、「大工業の直接的物質的諸前提のなかに循環を規定する一つの契機を見いだす、ということだ」とのべている。だが、マルク

スはどのような理由で機械設備が更新される平均期間が産業循環を説明するうえでの一重要契機であるのかという何を何ら具体的に説明してはいない。しかし、むしろ、マルクスは機械設備の更新期間と恐慌が発生する周期の間に存する時間的一致を単なる偶然の一致——経緯的な事実として指摘しているわけではなからう。両者の間の密接な関連を——一方が他方を説明する重要な契機であることを確信していたわけであろう。だが、エンゲルスとの手紙においてはこの点についての説明は与えられていないので、この点について触れている他の文章を次にみてみよう。

三

マルクスはどのような理由で機械設備を更新する平均期間が恐慌の周期性を説明する一重要契機であると考えていたのであろうか。この点を理解するための手がかりになると思われる記述を少し長く挙げるが三つ——『経済学批判要綱』、『資本論』Ⅱ部初稿、同Ⅱ稿Ⅱ現行版から各一つずつ——とりあげよう。⁽⁴⁾なお、掲げる順序はわれわれの検討の必要上から、『要綱』、『Ⅱ稿Ⅱ現行』、『初稿』の順とする。

引用1 『経済学批判要綱』より。

「……労働を測定するための単位時間が一日であったように、資本の復帰を測定するための総時間は一年であった。われわれが「こう」した理由は、第一に一年は多かれ少なかれ、工業で

つかわれる大部分の植物性原料の再生産にとって、自然的な再生産時間ないしは生産局面の継続時間だからである。だから流動資本の回転は、総時間としての一年のあいだの回転の回数によって規定されたのである。実際上では流動資本はその再生産を各回転の終りに開始するのであって、一年間の回転数は総価値に影響をおよぼすとしても、それぞれの回転期間中に流動資本が体験する運命 (Schicksal) は、なるほど流動資本があらたに再生産を開設するばあいの諸条件にたいして規定的であるようにみえながら、各再生産それ自体としては、流動資本の一つの完全な生活行為なのである。資本が貨幣に再転化されるやいなや、資本はたとえば最初の生活諸条件とは別の生活諸条件に転化され、ある生産部門から他の生産部門に投じられるのであって、だから再生産は、素材的にみれば同一の形態では反復されないのである。

固定資本の介入によって以上のことは変更され、そして資本の回転時間も、その回数を測定するための単位である一年も、もはや資本の運動にとつての尺度時間 (Zeitmaß) としては現れない。いまやむしろこの単位は、固定資本にとって必要とされる再生産時間と、したがって固定資本が価値として流通にはいりこみ、ついでその価値総体において流通から復帰するのに要するその総流通時間とによって規定される。流動資本の再生産は、この時間全体をつうじて素材的にもまた同じ形態でおこなわれなければならない、そして流動資本の必要な回転の回数、すなわち当初の資本の再生産に必要な回転の回数は、長短いずれか

一連の年数にわたり配分されるのである。したがって資本の諸回転を測定するための単位として、より長期の総期間が措定されるのであって、いまや諸回転の反復はこの単位と、外的な関連ではなく、必然的な関連をもっているのである。ページによればイギリスにおける機械装置の平均的再生産は五年である。だから実際の再生産はたぶん一〇年である⁽⁵⁾。固定資本の大規模な発展以来、一〇年前後 (plus ou moins) の期間で産業が通過するところの循環が、このようにして規定された資本の総再生産局面と関連しているということは、まったく疑問の余地がない。われわれはまた別の諸規定的根拠を見いだすであろう。しかしこれはその一つである。以前にも、収穫に豊凶があるように(農業)、工業の好況不況は存在した。しかし特徴的な諸期間、諸時期にわかれた多年にわたる産業循環 (Industriekrisis) は、大工業のものである。」(SS. 608-609. 邦訳Ⅱ、六七〇—七二頁)

引用Ⅱ 『資本論』Ⅱ部二稿(Ⅱ現行版)より。

「前貸資本の価値回転は、前貸資本の現実の再生産期間または前貸資本の諸成分の現実の回転期間とは別になるのである。たとえば、四〇〇〇ポンド・スターリングの資本が一年に五回転するとしよう。そうすれば、回転した資本は $5 \times 4000 = 20000$ ポンドである。しかし、一回転の終わりに帰ってきてきたあらためて前貸しされるのは、最初に前貸しされた四〇〇〇ポンドの資本である。この資本の大きさは、それが繰り返し資本として機能する回転期間の数によっては変えられないのである。(剰余価値は別として)。

そこで、(3)の例では、前提によれば年末に資本家の手に帰ってきたのは、(a)彼があらためて資本の流動的成分として投下する二〇、〇〇〇ポンドの価値額と、(b)摩滅によって前貸固定資本の価値から離れた八〇〇〇ポンドという額である。そのほかに相変わらず同じ固定資本が生産過程にあるが、その価値は八〇、〇〇〇ポンドではなく七二、〇〇〇ポンドに減っている。だから、前貸された固定資本が生きるだけ生きて、生産物形成者としても価値形成者としても機能し尽くして、補填されなければならなくなるまでには、まだ九年間生産過程が続くことが必要であろう。だから、前貸資本価値は、いくつもの回転を含む一循環を、たとえば前期の場合には一〇回の年回転から成っている一循環を、描かなければならない——しかもこの循環は、充用された固定資本の寿命によって、したがってその再生産期間または回転期間によって、規定されているのである。

だから、資本主義的生産様式の発展につれて充用される固定資本の価値量と寿命とが増大するのと同じ度合いで、産業の生命も各個の投資における産業資本の生命も、多年にわたるものに、たとえば平均して一〇年というようなものになるのである。一方で固定資本の発達がこの生命を延長するとすれば、他方では、同様に資本主義的生産様式の発展につれて絶えず進展する生産手段の不断の変革によって、この生命が短縮されるのである。したがってまた、資本主義的生産様式の発展につれて、生産手段の変化も、それが肉体的に生命を終わるよりもずっと前から無形の摩滅のために絶えず補填される必要も、増大する。

大工業の最も決定的な諸部門については、この生命循環は今日では平均して一〇年の周期をもつものと推定してよい。とはいえ、ここでは特定の年数が問題なのではない。ただ、次のことだけは明らかである。このような、連続的な、いくつもの回転を含んでいて多年にわたる循環に、資本はその固定的成分によって縛りつけられているのであるが、このような循環によって、周期的な恐慌の一つの物質的な基礎が生ずるのであって、この循環のなかで事業は不振、中位の活況、過度の繁忙、恐慌という継起する諸時期を通るのである。資本の投下される時期は非常に種々さまざまである。とはいえ、恐慌はいつでも大きな新投資の出发点をなしている。したがってまた——社会全体として見れば——多かれ少なかれ次の回転循環のための一つの新たな物質的基礎をなすのである。(K-II SS, 184~186, 邦訳、一三五—一六頁)

引用Ⅲ 『資本論』Ⅱ部初稿より。

「ある個別の資本を、たとえば、綿工業にたずさわっている資本を、そこではまた固定資本が大きな空間を占め、その価値流通 [Wertumlauf] がたとえば一二年にも達しており、したがって、この資本家の流動資本もまたこの事業部門に一二年間拘束されているという資本を観察すれば、この資本は、資本が三か月、等々のものには、引きあげられうるような事業の場合にくらべれば、より多く不運のまえにさらされていることがわかる。消費する諸原材料の価格変動、市場の状態や貨幣市場、等々の変化、競争によってひき起こされる生産物 [価格] の下落ある

いは上昇、労働の生産力の変化、等々、これらが交互に入れ替わり、相殺し、同時に重なって起こる。こうした観点からさらに、固定資本によって条件づけられている産業の回転循環がどのようになっているや恐慌の周期性の物質的基礎を形成するのか、という〔論点〕を展開することができる。〔邦訳、一五九―六〇頁〕

以上、長々と引用を行なったが、これらの引用文を若干立ち入ってみていくことにしよう。

引用Ⅰにおいてマルクスは、「固定資本の大規模な発展以来、一〇年前後の期間で産業が通過するところの循環が（いわゆる産業循環のことであろう——沢田）、このようにして規定された資本の総再生産局面と関連しているということは、まったく疑問の余地がない」とのべているわけだが、しかし、この引用Ⅰにおいては、先にみたエンゲルスあての手紙の場合と同様（時期的にも両者はほぼ同じころといえよう）、その理由を何らかかかげていない。それゆえわれわれは、その論旨の展開の仕方Ⅱ記述の仕方が、この引用Ⅰとかなり類似しているⅡの方へ目をむけることにしよう（内容上も両者はかなり重なりあっていると思われる）。

引用Ⅱの最後の方でマルクスは、今、引用Ⅰから再度ぬき出した部分とはほぼ同一内容と考えられる次のような記述を行なっている。すなわち「このような、連続的な、いくつもの回転を含んでいて多年にわたる循環に、資本はその固定的成分によって縛りつけられているのであるが、このような循環によって、周期的な恐慌の一つの物質的な基礎が生ずる」とのべている。ここ

では、いわんとする点は明瞭である。マルクスは、周期的な恐慌の（一つの）物質的な基礎が、へいくつもの回転を含む多年にわたる循環によって生ずるのだ、とのべているわけである。しかし、いかなる理由でそうなのか、この点は、この引用Ⅱにおいてもやはり示されていない。これに続けてマルクスは、さらに、「この循環のなかで事業は不振、中位の活況、過度の繁忙、恐慌という継起する諸時期を通るのである」と記しているが、ここでいう「この循環」というのは、前の文章との関係からみて、いうまでもなくへいくつもの回転を含む循環⁽⁶⁾、すなわち、回転循環のことであるとみななければならぬが、そうだとすれば、マルクスはいわゆる回転循環の中で事業は産業循環の諸局面を通過するとのべていることになる。したがって回転循環と産業循環⁽⁷⁾がかなり類似の概念として使用されているように見えるが、どうしてそうなのか、この点についても立ち入った説明はなされていらない。むしろ、以上の点は特別頭を悩ます必要はない、ごく簡単なことである、とでもいうかのごとく、「次のことだけは明らかである (Social equilibrium) として片づけているのである。

以上、引用ⅠとⅡについて若干立ち入ってしてみた。両引用においても、エンゲルスあての手紙におけると同様、機械設備（固定資本）の更新期間と恐慌の周期性との関係についての立ち入った説明は与えられていない。しかし、これらの引用を見る中でわれわれはマルクスが、①固定資本の存在によって条件づけられる回転循環によって周期的恐慌の（一つの）物質的基礎が生ずる、とみなしていること、②この回転循環の中で事業は

〈弛緩→恐慌〉に至るいわゆる産業循環の諸局面を通過すると考へてゐること、この二点を確認できた。

くり返しのべたように引用Ⅰ、Ⅱにおいては右の点についての説明——どうしてそうなのかという理由——は与えられていない。しかし、次に見る引用Ⅲにおいてはこの理由を考へる大きな手がかりが与えられている。項をあらためて、引用Ⅲを検討することにしよう。

四

前項〔三〕で掲げた引用Ⅲでは、はっきりと「こうした観点」から「固定資本によって条件づけられている産業の回轉循環がどのようなにして恐慌の周期性の物質的基礎を形成するのか」という論点を展開することができると記されていた。ここでいう「こうした観点」というのが、どのような観点のことであるのかということがわかれば、周期性の物質的基礎についてのマルクスの見解を知る手がかりを得ることができるのであろう。

「こうした観点」とは、どのような観点なのか。

われわれが掲げた引用Ⅲにおいては、「こうした観点」に先立って二つのことが語られている。すなわち、その一つは、固定資本が大きな空間を占め、その価値流通が一二年にも達しているため、流動資本もまたその事業部門に一二年間拘束されているような資本は資本が三か月等々のものに引きあげられうるような事業の場合にくらべれば、より多くの不運のまえにさらされてゐる」といふこと(これを①としておこう)。いま一つは、①の

へより多くの不運のまえにさらされる」といふ場合のその不運の内容についてである(これを②としておこう)。——②〈消費する諸原材料の価格変動、市場の状態や貨幣市場、等々の変化、競争によってひき起こされる生産物「価格」の下落あるいは上昇、労働の生産力の変化、等々、これらが交互に入れ替わり、相殺し、同時に重なって起こる〉——

「このような観点」といふのは①のことであろうか②のことであろうか。②は①の説明であるから、①と②の全体のことであろうか。①でいわれていることは結局のところ、長期間ある産業部門に縛りつけられている資本は短期間で引きあげることのできる産業に投下されている資本よりも〈不運〉Ⅱ〈有為転変〉(Schicksal)にさらされる機会が多いということであるが、この点を恐慌との関係でいえば、それだけ再生産の攪乱Ⅱ恐慌に陥る機会Ⅱ可能性が多いということである。確かに、長期間の間には資本は困難に遭遇するであろう。したがって恐慌の発生も不可避であろう。

「……資本の流通過程は、けっしてその日その日で終わるものではなく、資本の元の形態への復帰が行なわれるまでかなり長い期間にわたっているのだから、しかも、この期間は、市場価格が費用価格(生産価格のこと?——沢田)に均等化される期間と一致するのだから、また、この期間のあいだには市場に大きな変革や変動が生ずるのだから、そして、労働の生産性、したがってまた諸商品の実質価値にも、大きな変動が生ずるのだから、したがって、出発点——前提された資本——からこの一期

問のうちに資本が復帰するまでのあいだには、大きな破局が生じ、恐慌の諸要素が累積し、発展せざるをえない、ということ(9)は非常に明白であつて……。

長期の間には大きな破局の生じる可能性は非常に大きいであらう。しかし、この引用Ⅲでのべられているのは、あくまで、「恐慌の周期性」(の物質的基礎)についてである。恐慌の発生の可能性についてではない。とすれば、「こうした観点」というのは、①でのべているようなことではありえないであらう。

②の方はどうであらうか。

まず、「消費する諸原材料価格の変動……」等の「不運」へ有意転変と恐慌の関係はいかなるものであらうか。『剰余価値学説史』の中でマルクスは原料の価値変動と恐慌の関係について次のようにのべている。

「恐慌は、一、「貨幣が」生産資本へ再転化される場合に、二、生産資本の諸要素の価値変動によって、特に、原料のそれによって、起りうる。……」(10)

右の引用文では原料の価格変動ではなく価値変動について語られているのであるが、われわれのここでの問題にとつては——有為転変と恐慌の関係の説明にとつては——同じような意義をもつものとして扱つてよいであらう。右の引用を今少し続け、みてみよう。

「……生産または再生産の一定規模を前提しよう。ここでは不変資本を、与えられたもの、同じままのもの、価値増殖過程にははいつて行かないもの、とみなすことができる。原料の再

生産は、それに費やされる労働によつてだけでなく、自然条件に結びついたその生産性によつても左右されるから、その量そのものが、同じ労働量の生産物の量が、減少することはありうる。(凶作の場合に)。したがつて、原料の価値は増大し、その量が減少するか、または、従来の規模で生産を続けるために貨幣が資本のいろいろな成分に再転化されなければならない割合が乱される。原料により多くが支出されなければならず、労働にたいしてはより少ししか残らないのであつて、これまでと同じ労働量を吸収することはできなくなる。第一には、原料の不足のために物理的にそうである。第二には、原料に転化されなければならぬ生産物の価値部分が増大し、したがつて、可変資本に転化されうるその部分が減少するためである。同じ規模で再生産を繰り返すことはできない。固定資本の一部分は遊休し、労働者の一部分は街頭に投げだされる。不変資本の価値が可変資本に比べて増大し、よりわずかな可変資本しか充用されないのだから、利潤率は下がる。利潤率と労働搾取率が同じままであることを予想している固定的諸支出——利子や地代——は、同じままであり、一部は支払を受けることができなくなる。したがつて、恐慌が起る。労働恐慌と資本恐慌。したがつて、これは不変資本のうち生産物の価値のなかから補填すべき部分の価値上昇による再生産過程の攪乱である……」(11)

このように、原料価格(価値)の変動によつて、恐慌が生じ(う)る。なお、ここでは原料価格(価値)の変動についてのみに見たが、②でのべてあるすべてのことが、「資本の流通・再生産

ある。⁽¹³⁾

五

これまでみてきたように周期的恐慌Ⅱ恐慌の周期性の物質的基礎というのは、結局のところ機械設備（固定資本）の更新期間、あるいは固定資本の独特な回転に条件づけられての回転循環のことであった（それらに求められる）。そして、なぜ、それが周期性の物質的基礎なのかというと、回転循環や固定資本Ⅱ機械設備の更新は周期的に行われざるをえないが——この点は技術的Ⅱ物理的な観点からも定まっている——この更新が巨大な需要と経済の活発化をひきおこすからである。そして、そのことが恐慌をひきおこすことに連なるからである。むしろ、固定資本の更新——回転循環は周期性の、一つの物質的基礎ではある。しかし、それはいくつもある物質的基礎の中の単なる一部というにとどまらない、基本的なもの⁽¹⁴⁾と考えられよう。

ところで、周期的恐慌の物質的基礎についてのわれわれの考え——われわれはそれはマルクスその人の見解であると考えるわけだが——は、以上のように記してみると、あまりにもアタリマエすぎて、わかり切ったことのようにも思われよう。しかし、このようなマルクスの見解——周期的な突然の巨大な需要を通じての原料価格の変動や市場状態、貨幣市場の状態の変化、労賃の動向Ⅱ変化などによる再生産の攪乱Ⅱ恐慌——は、いわゆる産業循環（論）についてのマルクスの見地を、つまりそれが⁽¹⁵⁾どう展開されるべきかを示唆しているように思われる。

(1)

第二次世界大戦後の恐慌（と産業循環）のいわゆる形態変化について考える場合、便宜上、二つの時期（ないしは二つの問題）にわけてとりあつかうことができるであろう。その一つは、一九五七—八（九）年恐慌を中心として、そこにいたるまでの戦後恐慌と循環のあり方Ⅱ形態変化の問題であり、いま一つは、資本主義世界が戦後の困難を一応のり切って、一定の展開Ⅱ「発展」をとげた後で、その矛盾が激発してくる時期（七〇年代以降とみなしえよう）における恐慌と産業循環の問題である。前者については、戦後の恐慌が——例えば五七—八年恐慌——、自由競争の時期におけるそれのように、あるいは戦前、一九二九年恐慌のようにドラマチックな形をとらなかつたのはどうしてかという点を解明することが中心をなす問題であった。また、後者については、いわゆるスタグフレーションという現象をどう理解するかという問題が一つの中心的な問題であったといつてよいであろう。むしろ、両者の問題は相互に無関係な問題ではありえないだろうが、一応、戦後恐慌（と循環）をとり扱う場合、右の二つの問題（ないしは時期）にわけて考えることができると思われる。右の二つの問題の研究を通じて、戦争と恐慌の関係、国家独占資本主義的な対応の問題、戦後世界の構造の問題など多くの論点がとりあげられてきたし、一定の成果もあげられてきたことは事実であるが、なお、解明されるべき問題は多いと考えられる。それどころか、私には、そもそも、戦後の循環を考えるための基準たるべき〈循環論〉と⁽²⁾いうのが、どのようなものであるべきかという点で、また、すべての人を納得させるような研究視角が設定されていないように感じられる。小稿が全く基礎的な問題を検討しようとした理由は右のような考えに基づいている。

(2) そうした研究の代表的なものとしてさしあたり、林直道、『恐慌の基礎理論』、一九七六年、大月書店、富塚良三、『恐慌論研究』、一九六二年、未来社、『増補 恐慌論研究』は一九七五年、井村

喜代子、『恐慌・産業循環の理論』、一九七三年、有斐閣、など参照。

なお、宇野弘蔵氏の『恐慌論』（一九五三年、岩波書店）を起点とする一連の宇野シェーレの研究においても産業循環がとりあつかわれている（というより、むしろ宇野氏の恐慌論がそのようになっているといつてよい）が、その展開の仕方は、富塚氏や井村氏のような「均衡軌道」を理論展開の一基準にするものとはかなり異なっている。

最近の研究については、井村喜代子『資本論』の理論的展開』、一九八四年、有斐閣、所収「補章 恐慌論研究の現状と問題点」を参照。ただし、いうまでもないことであるが、井村氏の観点からの問題点の指摘がなされている点、念のため。

(3) これらの手紙は『マルクス・エンゲルス全集』（Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Institute für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin）、邦訳・大月書店、一九九〇年におさめられているが、ここでは、われわれが検討しようとする対象、（文章）をまとめてのせている久留間敏造篇『マルクス経済学レキシコン』九、一九七六年、大月書店、から引用させてもらった。

(4) 『経済学批判要綱』（Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie）は高木幸二郎監訳、一九六一年、大月書店に、『資本論』Ⅱ部初稿は、マルクス・ライブラリ3『資本の流通過程』『資本論』Ⅱ部第二稿、中峯照悦・大谷楨之介他訳、一九八二年、大月書店、現行『資本論』（Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie）は、大月書店『マル・エン全集』のそれによった。なお、Ⅱ部初稿以外の訳文Ⅱ引用は(3)の手紙と同様『レキシコン』九、にのっている。

(5) 『レキシコン』では、この部分の訳は「……いまや諸回転の反復はこの単位と、外的な関連ではなく、必然的な関係をもっているのである。だから、バベジによればイギリスにおける機械類の平均的再生産は五年なのであるが、実際の再生産は、もしかすると一〇年かも知れない……」としてある。このように訳した理由—

つまり、われわれの掲げた引用とへだからでつないであるつなぎ方が異なっている理由——に関してレキシコン九の「葉」で説明をされているが、われわれは、やはり、高木氏監訳の訳文をかかげることにした。

(6) 「回転循環」という概念については引用した所からもほぼ理解される所であるが、念のため、Ⅱ部初稿から、それについて説明した部分を引用しておく。

「大規模に大きな固定資本をもって営まれているすべての生産部門においては、特定の形態に拘束されて、建築物、機械、船舶等々として存在している固定資本の機能過程は、多かれ少なかれ何年にもわたっており、したがってそれは、(1)自身が一年あるいは一年以上で「一回」しか回転しないときも、総資本の回転を何回も含んでいる。そして、(2)総資本の回転に必要な資本の流動部分の回転数を一年に n として固定資本の損耗の総価値の流通が行なわれる年数を x 年とすれば、前貸固定資本が現物で補填されるときはじめて完了する機能資本の総再生産過程は、総資本のうち流動分の $n \times$ 回転と総資本の総価値の x 回転とを含んでいるこのような期間を、私は資本の回転循環と呼ぶ」（邦訳一五八頁）

(7) 例えば、次のとおりである。

「近代産業がそのなかで運動する回転循環（Umschlagzyklen）——平静状態、活気増大、繁榮、過剰生産、破局、停滞、平静状態という循環であつて……」（K. III S. 374、邦訳 四五〇頁）。

(8) 『レキシコン』九の「葉」でG氏がのべているこの引用文の要約の仕方は、こうした観点から問題をとらえているように見える。もし、そうであるとすれば、それは、われわれの見解とは少し異なるといわなければならない。

「……ここで有為転変というのは、原料価格の変動や、市況、貨幣市場の変動、競争の結果生じる生産物価格の騰落、労働生産力の変化、等々ですが、こういう要因がわかるがわる、あるいはたがいに打ち消しあい、あるいは増幅しあつて、この資本を宿命

的変転にさらす。こういう観点から『固定資本によって条件づけられる工業の回転循環が、いかにして、恐慌の周期性にとつての物質的な基礎をつくりだすのか』ということがさらに展開されるのだと(葉・一二頁)。

(9) 『剰余価値学説史』(Theorien über den Mehrwert) II 『トル・エ
ン全集』26 II S.495 邦訳、六六八頁。

(10) 同 S.516 邦訳 六九六頁。

(11) 同 S.516 邦訳 六九七頁。

なお、本書の編集者は、手稿の一部が引きさかれていたが、その部分でマルクスが「可変資本の価値の変革から」生ずる恐慌について論じている、という推測をすることは可能である。とのべている。

(12) K III、S.260 邦訳 二二三頁。

(13) ここでわれわれにとつてのいま一つの問題、すなわち「弛緩→恐慌」という産業循環の諸局面がこの回転循環の中で推移するとマルクスがのべている(ように思われる)のはどうしてなのかという点、これについて考えてみよう。次のように考えられるのではなからうか。

確かに資本主義の下では弛緩から恐慌に至る一連の起伏に富む諸局面から成る循環が認められる。資本主義の下での生産や蓄積の動向は発展は一直線のそれでは決つてない。いくつかの局面から成る循環(産業循環)こそ、資本の現実の運動のあり方——一循環であるわけだろ。

しかし、このような産業循環が、資本の運動の現実の循環(一循環——一単位)であつたとしても、それは、資本の運動の一単位——一循環そのものではないといつてよいであらう。資本の運動の一単位——一循環の実際の展開——表現形態が起伏に富むいくつかの局面から成る産業循環であるといふべきであらう。では、資本の運動のほんとうの一単位——一循環そのものとは何か。資本を投下し

いく回もの生産をくり返し(むろんそれを実現し)、そして、最初に投下した資本をすべて回収し償却しおわる——これこそ、資本の運動——一循環そのものといふことができよう。この一循環——一単位それ自体がどのような展開を現実に行なつていくかは、この循環(一単位)そのものは何であるかといふことは一応次元の異なる問題である。そして、ここで述べた資本の一循環(運動の一単位)そのものは、いふまでもなく、いわゆる「回転循環」のことである。資本を投下し回収するまでの一循(その間にいくつもの回転を含む)、こうした回転循環が資本の運動の一単位——一循環そのものであつて、産業循環といふのは(つまり、弛緩や突出や繁栄などという起伏に富む諸局面から成る循環)循環そのものの現実のあり方——表現——運動形態である、と考えるべきであらう。

(14) これがあくまでも「一つの」基礎にとどまること(すべてではないこと)について注意しなければならない点については三宅義

夫氏が『マルクス エンゲルス イギリス恐慌史論』上・下、一九七四年、大月書店、でくりかえしのべているとおりであらう。例えば次のとおりである。「マルクスは、機械の更新期間が『大工業の直接的物質的諸条件』のうえから産業循環を規定する重要な契機だとして見るとともに、右のいずれの記述においても、それが産業循環を規定する「一つの」契機たるものであることを——つまり他にいくつかの契機があることを——強調していることに注意されねばならない」(上巻 三三〇頁)。

なお、ついでながら、右に続いて三宅氏はマルクスが当初から産業循環の期間を一〇年とみていたのではなく、もっと短いものと考へていたこと、この物質的基礎条件にふれる中で一〇年説が明

確になってきている点についてものべている。

「また目を惹くことは、ここでマルクスが産業循環の期間をほぼ『一〇年』と記していることである。さきはこの前年の一八五七年一月の論説『イギリスにおける急激な悪化』を見たさい、マルクスがノーマルなら恐慌が『二年前』にやってきたはずだということ論証しようとしたのは、当時の産業循環の周期を原則として一〇年よりも短いと考えていたことによるものであったのであろうと述べ、また同時にこの論説のなかには一〇年を周期と見る見方への傾斜も窺われると注記しておいたが（本書二七七八ページ）、この一八五八年三月の手紙および原稿ではすでにほぼ一〇年という見方をはっきりと採っていることが見られる」。(同)

(15) マルクスの周期性（と循環）についての見解をわれわれは以上のように考えたが——もっともマルクスは循環論をそのものとして論じてはいないから、あくまでもわれわれの推測であるが——、ここで興味あるのは、周期的に再生産過程を攪乱させるような原因（回転循環）を資本主義の運動の内部に求め基礎づけているとはいえ、他方では原料だとか労賃だとかの動向を問題にしているという点である。この点たとえば利潤率低下に反対の作用の一つとして外国貿易の問題をとりあげていることと類似のとり扱い方をしているように思われる。つまり、同期性や循環の解明のためには必ずしも一〇〇%完全な資本主義を想定してそこでの例えば〈生産と消費〉の関係に矛盾がどう循環過程の中で推移し展開していくかというような形で問題をとり扱っているわけではないということである。この点、現実を分析し把握するための理論はどのようなものであるべきかという問題を含んでいるように思われるが、そのことの検討し考察は後の課題としたい。